

# 学びの風便り

リーディングスクール通信32 R6.11.20

発行：松本市教育委員会 教育研修センター

## 特集！リーディングスクール・ラボ2 教育哲学研修

10月29日(火)、教育文化センターを会場に「リーディングスクール・ラボ2」が開催されました。リーディングスクールとパイオニア校から約60名が集まり、これまでの研究活動について中間報告を行いました。参加者は互いに意見を交換し、今後の研究の方向性について議論を深めました。後半には、教育哲学者の苦野一徳先生を講師に迎え、オンライン講演会が開催されました。

### 中間アウトプット(各校中間報告会)

前半の中間アウトプットでは、各学校から、これまでの研究の歩みの中で取り組まれた挑戦やエピソード、手応えや苦労、今後の見通しなどが発表されました。

例えば、子どもたちの主体性を育むために、プロジェクトベースの学習を導入した事例、地域社会との連携を強化し、地域資源を活用したり、地域課題を解決していく探究の事例、単元内自由進度学習に取り組んでいる事例などが紹介されました。

いずれの発表も、具体的な先生方の様子や子どもたちの姿を交え、新たな学びの創り手としての過程を生き活きと伝えていただきました。

発表を聞いた参加者からは、「具体的な事例を聞くことで、自分たちの学校でも実践できるヒントを得られた」といった感想や、「どのようにして子どもたちのモチベーションを維持しているのか」などの具体的なフィードバックが寄せられ、活発な意見交換となりました。



アウトプットの形態も各校オリジナル。いろいろな形が見られました。

#### 【参加者の感想より】

- 4つの発表を拝見し、本校での実践とも比べ、校内の先生の負担はせざる得ない部分もあるが、先生方の環境が丁寧すぎて、子どもの学びを阻害している部分もあるのではと感じた。本気で「どんな子ども像をめざしたいのか、どんな学校にしたいのか」あり方を共有することこそが大切だと感じた。
- まずは、自分自身の学ぶ姿勢を止めないように努力しようと思いました。他校の素敵な実践を知ることが刺激になり、自然と明日からどうしようと考えていました。子どもの願いを大切に、子ども主体の活動について、未だ私の中で進む道がわからずに思い悩んでいます。
- 他校の先生方の熱心さ、前向きさに触れられる時間となり、エネルギーをいただいた気持ちになりました。松本市全体ががんばっている！だから、みんな頑張ろう！と、自校にもその熱意や空気を広めたいもんだなあ…と思った。
- 教師の指導観をどのように更新していくのか、各校の取組から学ばせていただいた。先生方の授業改善への必要感や、研修への参加意識を高めるためには、研究主任だけではなく校内の先生方を幅広く巻き込みながら取組を進めていくことが大切であると感じた。総合的な学習の時間の年間計画作成や研修内容の検討、授業参観での生徒の学びの見取り等、全職員がかかわる工夫を考えるとともに時間等をきちんと確保したい。

## 苫野一徳先生と学ぶ「子どもが主人公」の哲学（教育哲学研修）

### ～ 学びのゆるやかな構造転換に向けて ～

2年越しに実現した苫野一徳先生の教育哲学研修が、リーディングスクール・ラボに続き開催されました。講演は「哲学とは…本質を考え抜くことで、さまざまな問題を根本から解き明かす考え方を示す学問。『よい』教育とは何か？それはどうしたら可能なのでしょうか？」という問いかけからスタートしました。苫野先生が提唱されている「本質観取」のやり方が今年度から道徳の教科書（光村図書出版）に掲載されていることが紹介されました。



続いて、「**そもそも学校は何のためにある？**」という問いを通して、物事の本質はどういうことか考えること、そして今までの在り方や今後の方向を問い直すことで、「学校とは？」「学びとは？」を再考する哲学の奥深さに触れることができました。特に民主主義の根本原理である「**自由の相互承認**：お互いを対等に『自由』な存在として認め合う」（ヘーゲル）の感度を育む役割をもつ公教育は、どうあるべきか、改めて問い直す必要性を感じる機会となりました。150年間変わらない学校システムのもとでは、「いじめ、不登校、同調圧力」など様々な問題が現れています。苫野先生は、こうした現状を踏まえ「学びのゆるやかな構造転換」をどのように実現していったらよいのか、具体的な示唆を与えてくださいました。最後に「学校において“子どもが主人公”とはどういうことか？、そのために「私たち」「学校」がどのように変わっていくべきなのか、考える手がかりをいただきました。

多くの学校で使われている「多数決」。「**多数決は民主主義の本質ではありません。さて、それはなぜでしょうか？**」。ぜひ皆さんでもう一度問い直していただけたらと思います。

#### 【参加者の感想より】

- 「本質を考える」ということから、今まで何となく逃げてきてしまった自分がいましたが、改めて話を聞いて、本質を考えることの大切さを感じました。難しい感じがしますが、実はみんなで本質を考えることが必要だと思います。この話を受けて、もう一度、部会の中で、「子どもに委ねるとはどういうことか」自分の授業を振り返った時に、何を委ねていたのか何を大事にして授業をしているのか、そして、自分の探究的な授業の本質的な問いは何かについて、先生たちと語り合うことができました。そのきっかけを下さった苫野先生には感謝の気持ちでいっぱいです。まずは、職員が語り合う雰囲気的大事に、またその雰囲気が子ども達にも伝わるように対話を大事にしていきたいと思います。
- 本研修を校内の4人（自分の含め）の先生方と一緒にオンラインで受講した後、先生方と苫野先生がくださったお話についてたくさんの対話が生まれました。（研修終了後、1時間ぐらいいしゃべっていました）苫野先生の講義をきっかけにして、日頃自分たちが考えていることや教育実践を振り返ることができ、なおかつ「私たちがしていることは間違えなかった。」と感ずることができ、「今、自分たちがしていることや目指していることは、形は少し違っていても『学びの構造転換』をしようとしていたり、一人一人の子どもに寄り添いながら『学びの個別化』をちゃんとしているんだ」と自覚することができました。研修が終わり、研修を受けた先生との対話が終わり、職員室に戻り、すぐ周りの先生にも講義の内容をお伝えしました。聴いてくださった先生は、「じゃあ、私がやっていることは間違っていないということですね。嬉しいです。」と喜んでくださいました。今回の研修を通して、研修から学んだことを伝え合うことの大切さと、それを広めていくことの大切さも学びました。…
- 私は時間の関係にかこつけて多数決をどんどん使ってきてしまっていたので、ぐさりと刺さった気持ちでした。C案を見つけ出す、という視点の大切さや、話し合いに慣れた子達はどんどん短時間で決めだしていけるということを教えていただけたので、翌日早速実行しました。「多数決にしてきちゃって今までごめんね…」から始めました。子どもたちは、「何で？いいじゃん」と言いましたが、「全員で決めたい、全員のきもちや考えが盛り込まれた形で進めたい、だって全員の1組だもんね」と伝えると、今まで多数決の勝負にこだわってきた児童を含めた全員の顔がとても優しくにこやかなことに気がつきました。今までは頑なに自分の意見を貫く男児が、昨日は「(大多数派の)理由を聞いたら、俺の気持ち動いたから、意見変えるわ。納得したから別に多数決する必要ないわ。俺の気持ちみんなと同じだから。」と言い、自然とみんなから拍手がわきました。感動でした！